

# 自分の限界に挑戦

## Overcome My Limits

吉田裕美 Yumi YOSHIDA

先週、ある学会の近畿支部が主催する若手の夏期セミナーに参加するため、自分の自己紹介を作成した。自己紹介の項目に、「将来の夢」という欄があった。もう40歳も過ぎた中年の私が夢と言われてもピンとこないので、「限界に挑戦」と書いた。自分がここまでできないであろうと決めつけている限界を乗り越えることは、何歳になっても楽しい。

現在、なんの限界に挑戦中かというところ、まず一つは研究。世界中の研究者に「あの人のデータは信用できる」と言われるようになりたいと思う。これまで20年程研究に携わっているが、まだまだ未熟者に到達していないという焦燥感のほうが大きい。

二つめは、子育て。学位を取得したのち、しばらくして結婚。その後、5年の別居結婚を経て、ようやく長女を授かった。高齢出産の境目である36歳であった。それから、3年後、二度目の出産で双子を授かった。現在、42歳で5歳の長女、3歳の次女・三女の面倒を見ているが、蜘蛛の子を散らすように飛び出していく子供たちを、牧羊犬のように追いかけてながら、自分の限界をひしひしと感じている。

三つめは、マラソン。体力の限界を感じて、ジョギングを始めた。はじめは1.5 km程度を走れるか走れないかであったのを、どれだけ長く走れるようになるかが挑戦だった。気が向いたらでは長続きしないと思ったので、一気に目標を高くしてフルマラソンに申し込んだ。

自分の思っている以上の力を出すためには、切羽詰まった状況に自分を追い込むことが一番のような気がする。それを感じたのは、子育てである。出産前には、本当に仕事と育児が両立できるのだろうか、双子を育てることができるのだろうかと非常に心配した。案ずるより産むが易し。ライフジャケットのごとく体の前後に子供を抱えたまま、3セットのお昼寝布団を持ち、長女の手を引いて保育園に行くというウルトラCの技ができるようになった。臆面もなく、職場・研究室の教授・学生・親・ご近所・保育園・ママ友に頼り、

助けてもらった。自分一人の努力では子育てはできない。皆のご厚意に涙がでるほど感激した。これからは一つ一つ恩返しをしなければと考えている。

一方、マラソンも半分夢がなかった。いったん参加申込をすると、絶対に完走したいと思った。制限時間6時間内に、42.195 kmを走りきるには、どれくらいのペースでどれくらいの距離を走れるようになるべきか、私なりに調べ、すこしずつ練習を始めた。5カ月の練習期間を経て、5時間10分程度で走れたときには、なにか一つ壁を乗り越えられたような気がした。

では、研究のほうはどうか。これが私の中で一番の課題になっている。まだまだ修行が必要なのだが、子育てとのバランスがあり、時間に制約がある。論文数などで対等に勝負すると、すべての時間を費やして没頭している男性研究者には到底及ばない。そういう場合は、研究の新規性とデータの信頼性で勝負するしかない。研究の新規性をどうやって出すかはとても難しいと思う。けれども、自分の中で薄らボンヤリ感じているのは、自分の得意とする手法・分野は何なのかを十分に認識したうえで、他分野に恐れることなく突っ込み、他分野の現象を自分の分野に引き込むことが、新規性につながるかもしれないということである。他分野の学会に出てみると、その分野の学部生にも及ばないほど、知識はヨチヨチ状態だ。聞かぬは一生の恥！と気合いを入れ、どんな初歩的なことでも人に質問するよう心掛けている。一方、データの信頼性もまた重要である。論文を検索し、一つ一つのデータを検証すると、膨大な数の論文があるにもかかわらず、避けては通れないような信頼性の高い論文の数は、そう多くない（電気分析化学の分野に限ったことかもしれないが）。後は、どうやって自分を追い込むかである。今のところ、論文を発表し、世界の研究者による評価を、なるべく早く、ともに研究を進めている学生さんや共同研究者に還元し、喜んでもらえることが一番だと考えている。時間の制約がある中で、どこまで自分ができるのか、限界に挑戦である。



吉田裕美 Yumi YOSHIDA

京都工芸繊維大学  
准教授、理学博士。  
専門は電気分析化学。  
E-mail: yyoshida@kit.jp